

寄稿論文

元後期ロイヤリストがアメリカで描く
アッパーカナダ植民地と1812年戦争(1)

橋川 健 竜

カナダの軍事史研究者は、アメリカ合衆国(以下アメリカと略する)とイギリスがカナダほかを舞台に戦った1812年戦争(1812年~1815年)にかんする入門書に、「両者ともに勝利した戦争」という副題をつけている。¹⁾米加に話を絞れば、戦争終結以降の両者の同時代的な感覚の形容として、この副題は間違っていない。

カナダにとって1812年戦争は、開戦150周年を記念する論集のタイトルを意識するなら、「国境を防衛した」戦争である。²⁾開戦当初、人口が少なく守備態勢も不十分ゆえ、アッパーカナダ植民地(現オンタリオ州)はアメリカ軍に容易に制圧されるだろうと懸念されていた。この悲観的予測を覆した経験は戦後のカナダ社会に強く刻印された。この戦争の時期に台頭した若い世代を中心に、アッパーカナダでは植民地と植民地人としての自己が肯定的に理解され、同時に強い反アメリカ感情が支配的になる。1960年代から80年代に刊行された研究によれば、1815年以降、保守派、改革派を問わず政治家はこの戦争に貢献した経験を売りにして経歴を積み、イギリスへの忠誠を前提に論戦を展開していった。³⁾

アメリカも「勝利」したという解釈は、戦争末期の経緯を考慮すれば理解しうる。1814年暮れ、戦争前の原状に復帰することで和平交渉が合意に達する。その知らせは、アンドルー・ジャクソンがニューオーリンズで1815年1月にイギリス軍に勝利した一報とはほぼ時を同じくしてワシントンに到着した。この展開がアメリカ人に、イギリス相手に再び主張を通したような印象と自信を与えた。1814年8月に首都ワシントンを攻撃されて大統領

¹⁾ Wesley B. Turner, *The War of 1812: The War That Both Sides Won*, second edition (Toronto: Dundurn, 2000).

²⁾ Morris Zaslow, ed., *The Defended Border: Upper Canada and the War of 1812* (Toronto: Macmillan of Canada, 1964). J. Mackay Hitsman, *The Incredible War of 1812: A Military History*, updated by Donald E. Graves (Toronto: Robin Brass Studio, 1999; original edition, Toronto: University of Toronto Press, 1965) も参照。

³⁾ S. F. Wise, *God's Peculiar Peoples: Essays on Political Culture in Nineteenth-Century Upper Canada*, ed. A. B. McKillop and Paul Romney (Ottawa: Carleton University Press, 1993); Jane Errington, *The Lion, the Eagle, and Upper Canada: A Developing Colonial Ideology* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1987); David Mills, *The Idea of Loyalty in Upper Canada, 1784-1850* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1988); J. K. Johnson, *Becoming Prominent: Regional Leadership in Upper Canada, 1791-1841* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1989). 刊行時期は下るが、以下も参照。Carol Wilton, *Popular Politics and Political Culture in Upper Canada 1800-1850* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2000); 木野淳子「1820年代のプレスに見る『外国人』論争とアッパーカナダ植民地住民」『カナダ研究年報』21号(2001年)、39-57頁。

公邸が焼き討ちされたことをはじめ、アメリカに不利な多くのことがらからは目がそらされた。⁴⁾

戦争終結後の米加はそれぞれの歴史を進んでいき、19世紀前半には両者の関係はあまり深まらなかった。アメリカでは1815年以降もカナダ併合論が時折発生したが、実質を伴っていなかった。⁵⁾ 他方カナダはアメリカを警戒し続けた。イギリスからの移住が本格化し、社会のイギリス色が濃くなっていく。⁶⁾ こうした流れを見れば、1812年戦争の扱いに米加で差があるのも理解できる。カナダ史ではこの戦争の意義は確立しているが、アメリカで1989年に刊行されて標準的な参考文献になった1812年戦争通史は、「忘れられた紛争」という副題だった。⁷⁾ アメリカでは、この戦争の研究は開戦に至る反英思潮と国内政治過程の分析に傾いている。カナダへと領土を拡張する意図はなかったことが明らかになっており、なぜ与党リパブリカンが強硬に開戦を求めたかが注目を集め続けている。⁸⁾

だが開戦200周年を過ぎた今日では、アメリカ史の側で、18世紀後半から1812年戦争までについて新しいアプローチによる研究が進んでいる。その大きな特徴は、アメリカに議論を限らず国境をまたぐ広域的な空間を設定して、人口各層や集団の多様性に留意しながら米加を一括して論じていることである。先住民諸集団の行動が重点的に検討され、毛皮交易者の活動がどう変化したかも分析される。それらの分析を通じて、国境とそれを実効化させる力を備えた国家の出現過程が描かれ、1812年戦争はその末尾にあって、人々に英米いずれかへの排他的な帰属を強く迫った出来事と位置づけられる。⁹⁾ これらの研究

⁴⁾ George Dangerfield, *The Awakening of American Nationalism 1815–1828* (New York: Harper, 1965); C. Edward Skeen, *1816: America Rising* (Lexington: University Press of Kentucky, 2003); Daniel Walker Howe, *What Hath God Wrought: The Transformation of America, 1815–1848* (New York: Oxford University Press, 2007). 金井光太郎「1812年の戦争による大陸軍の記憶再編と国民国家神話の確立 レパブリカニズムの政治文化からナショナリズムへ」『Quadrante』10号(2008年)、305–323頁。

⁵⁾ Reginald C. Stuart, *United States Expansionism and British North America, 1775–1871* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988).

⁶⁾ Elizabeth Jane Errington, “British Migration and British America, 1783–1867,” in *Canada and the British Empire*, ed. Phillip Buckner (Oxford: Oxford University Press, 2008), 140–159; Barbara J. Messamore, ed., *Canadian Migration Patterns: From Britain and North America* (Ottawa: University of Ottawa Press, 2004), 45–133. ヴァレリー・ノールズ(細川道久訳)『カナダ移民史 多民族社会の形成』(明石書店、2014年)、67–79頁。

⁷⁾ Donald R. Hickey, *The War of 1812: A Forgotten Conflict* (Urbana: University of Illinois Press, 1989).

⁸⁾ ここでは主要な先行研究をいくつか挙げるにとどめる。Bradford Perkins, *Prologue to War: England and the United States 1805–1812* (Berkeley: University of California Press, 1963); Roger Brown, *The Republic in Peril: 1812* (New York: Columbia University Press, 1964); Lawrence Peskin, “Conspiratorial Anglophobia and the War of 1812,” *Journal of American History* 98, no. 3 (Dec. 2011): 647–669; Richard W. Maass, “‘Difficult to Relinquish Territory Which Had Been Conquered’: Expansionism and the War of 1812,” *Diplomatic History* 39, no. 1 (Jan. 2015): 70–97. 中嶋啓雄「一八一二戦争の外交政策 “The Innocents Abroad”」『一橋論叢』109巻1号(1993年1月)、140–160頁; 遠藤寛文「新大陸における「帝国」の残滓 1812年戦争期の「親英勢力」とアメリカの自画像」『アメリカ研究』51号(2017年)、1–20頁。

⁹⁾ Alan Taylor, *The Divided Ground: Indians, Settlers, and the Northern Borderland of the American Revolution* (New York: Alfred A. Knopf, 2006); Alan Taylor, *The Civil War of 1812: American Citizens, British Subjects, Irish Rebels, and Indian Allies* (New York: Alfred A. Knopf, 2010); William H. Bergmann, *The American National State and the Early West* (New York: Cambridge University Press, 2012); Gregory Stephen

はカナダ史の文献と史料を積極的に参照していて、イギリス軍が1815年までは先住民を積極的に戦争に動員したことも重要な論点になっている。¹⁰⁾ 18・19世紀カナダ史研究ではアメリカ史の関連文献も参照するのは通常のことだが、アメリカ史の動向としては、これは大きな変化である。その他に、文化史の手法をとる研究も散見される。人種やジェンダーを異にする様々な集団の戦争経験とその陰影を数多くの表象から掘り下げ、米加ともに、1812戦争の受け止めには愛国的心情で一括できない多様性があったと示唆している。¹¹⁾

本稿はこうした研究動向を踏まえ、米加史双方に通じる18・19世紀研究を目指す準備作業的なノートである。以下では戦争中にカナダを退去したある人物が著した、アッパーカナダを紹介する書籍を検討する。この書籍はカナダ史の定番的な史料で、同植民地のエリー湖とオンタリオ湖にはさまれた地域の住民が戦争にどう反応したかを記した章が、特に頻繁に参照されてきた。ただし、カナダ史研究はこの書籍がアメリカで刊行され、4年間で5度改訂されたことに(書名も計3種類になる)、あまり注目していない。アメリカでの刊行と改訂に着目するならば、アメリカでは無名である著者マイケル・スミスの語りについて、新しい問いを立てることができる。¹²⁾ アメリカで刊行されたことは著者のカナダの語り方に影響したか。改訂はアメリカの読者の感覚への摺り合わせを意図したか。であるならば、元カナダ移住者としての著者の個性は残ったか。

本研究では著者と書籍の内容を紹介し、1812年の戦争を紹介する章を中心に、論点を絞って特徴を検討する。分量の都合で本稿では最初の版のみを扱い、第2版以降における書き

Wigmore, "The Limits of Empire: Allegiance, Opportunity, and Imperial Rivalry in the Canadian-American Borderland" (Ph.D. diss., University of California at Davis, 2013); Lawrence B. A. Hatter, *Citizens of Convenience: The Imperial Origins of American Nationhood on the U.S.-Canada Border* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2017). この新動向を活発化させたのは以下の論考である。Jeremy Adelman and Stephen Aron, "From Borderlands to Borders: Empires, Nations, and the Peoples in Between in North American History," *American Historical Review* 104, no. 3 (June 1999): 814–841. 最新の1812年戦争研究ガイドも、北米大陸史、さらにヨーロッパに留意した構成になっている。Donald R. Hickey and Connie D. Clark, eds., *The Routledge Handbook of the War of 1812* (New York: Routledge, 2016).

¹⁰⁾ J. R. Miller, *Skyscrapers Hide the Heavens: A History of Indian-White Relations in Canada*, third edition (Toronto: University of Toronto Press, 2000); Colin G. Calloway, *Crown and Calumet: British-Indian Relations, 1783–1815* (Norman: University of Oklahoma Press, 1987); Robert S. Allen, *His Majesty's Indian Allies: British Indian Policy in the Defence of Canada, 1774–1815* (Toronto: Dundurn, 1992).

¹¹⁾ Nicole Eustace, *1812: War and the Passions of Patriotism* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012); Nicole Eustace and Fredrika J. Teute, eds., *Warring for America: Cultural Conflict in the Era of 1812* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2017); Robin Jarvis Brownlee, "The Co-optation of Tecumseh: The War of 1812 and Racial Discourses in Upper Canada," *Journal of the Canadian Historical Association* 23, no. 1 (2012): 39–63; Elsbeth Heaman, "Constructing Innocence: Representations of Sexual Violence in Upper Canada's War of 1812," *Journal of the Canadian Historical Association* 24, no. 2 (2013): 114–155.

¹²⁾ G. R. Craig, "Smith, Michael," in *Canadian National Biography*, volume 5, ed. Frances G. Halfpenny (Toronto: University of Toronto Press, 1983), 765–766. スミスはアメリカの主要人名事典では紹介されておらず、また著作以外の史料がきわめて少ない。先行研究として、彼の貧しさに注目して執筆へのこだわりを論じる文化史研究がある。Ann Fabian, *The Unvarnished Truth: Personal Narratives in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1998), 20–29.

換えについては別稿を準備している。本研究の目的は日本であまり知られていない史料の紹介であり、戦争の網羅的な検討ではないことを、ご了解いただきたく思う。

開戦前夜のアップーカナダ植民地は人口約7万7000人(1811年)で、国境を接するニューヨーク州や西部のオハイオ州(それぞれ95万9000人と23万1000人、いずれも1810年)と比べて、大きな差がある。さらにその6割～8割は、同植民地が1791年に設立されてから以降の、アメリカからの移住者だった。彼らは後期ロイヤリストと呼ばれ、アメリカ革命期のロイヤリストとは区別される。ロイヤリストは統治原理をめぐる見解の相違、革命を支持した愛国派から独立戦争中に受けたさまざまな苦痛などを理由に、アメリカ革命中かその直後にカナダに渡った。これに対し後期ロイヤリストは実利志向で、アップーカナダ植民地の初代副総督シムコーがアメリカからの入植を認め、好条件で公有地を取得できる手続きを設けたのを受けて移住した。当時の新聞は、彼らの多くは中部大西洋岸諸州から来たが、ニューイングランド出身者もいたと記し、近年の研究もこれを実証している。アメリカ人には国内西部に加えて、国境の北にも移住先があったといえる。¹³⁾

本稿で取り上げるマイケル・スミス(1776年～没年不明)はこの後期ロイヤリストに該当する。スミスはペンシルヴェニア州南東部のチェスター・カウンティに生まれたが、青年期以降、ヴァージニアを皮切りに各地を転々とする。自伝にも詳細は記されていないが、バプティストの説教師として活動していたようである。1808年に「楽な条件で土地が取得できる」アップーカナダに渡り、開戦時には米加国境のナイアガラ川から数マイルの地点に暮らしていた。世代とカナダに渡る理由は、まさに後期ロイヤリストのそれである。¹⁴⁾

だがスミスは、いくつかの点で例外的な後期ロイヤリストである。第一に、多くの後期ロイヤリストは1812年戦争中、イギリスに忠誠を宣誓してカナダ側の軍事動員に応じることを余儀なくされたが、スミスはイギリスに忠誠を宣誓せず、アメリカに引き揚げた。カナダ側は開戦初期の戦闘に勝利して一息ついた1812年晩秋、軍事動員への参加を拒否してその理由にアメリカ籍であることを挙げる住民の存在を問題視し、布告を出して期限内の退去手続きを呼びかける。彼はこれに応え、アメリカに出国する通行証を得る。カナ

¹³⁾ Frederick H. Armstrong, *Handbook of Upper Canadian Chronology*, revised edition (Toronto: Dundurn, 1985), 272; Alan Taylor, “The Late Loyalists: Northern Reflections of the Early American Republic,” *Journal of the Early Republic* 27, no. 1 (Spring 2007): 1–34; Peter Marshall, “Americans in Upper Canada, 1791–1812: ‘Late Loyalists’ or Early Immigrants?” in *Canadian Migration Patterns*, ed. Messamore, 33–44; Gerald R. Craig, *Upper Canada: The Formative Years 1784–1841* (Toronto: McClelland and Stewart, 1963), 43–49, 47, 51; “Upper Canada,” *Daily National Intelligencer* (Washington, DC), Jan. 26, 1813. 住民総人口に占める後期ロイヤリストの割合については史料が少なく、多くの研究は6割ないし8割のいずれかとしている。以下も参照。Donald Harman Akenson, *The Irish in Ontario: A Study in Rural History*, second edition (Montreal: McGill-Queen’s University Press, 1999), 111–112, esp. 111n117.

¹⁴⁾ スミスについては、以下の自伝を参照。M. Smith, *A Narrative of the Sufferings in Upper Canada, with His Family, in the Late War; and Journey to Virginia and Kentucky* (Lexington, KY: Worsley and Smith, 1817), 3–8, 16. 引用は6。

ダで築いていた生活基盤を犠牲にしたのである。¹⁵⁾

第二に、後期ロイヤリストは初期アッパーカナダ社会について、まとまった叙述をほとんど残していない。理由として、彼らが全体的に低い社会階層の出身で、また新天地での生活に追われていたことが指摘されている。これに対しスミスは、アッパーカナダ地誌の紹介と、戦争に困惑する住民の姿を描いた手記からなる書籍を刊行した。彼はアッパーカナダの環境に好感を抱き、地理と政治体制について「一般的な情報を提供」したいと、開戦の前年に副総督に書籍刊行の許可を求めている。¹⁶⁾

しかし、スミスの書籍はカナダでは刊行されなかった。戦争が勃発すると彼の住んでいた地域にはイギリス軍、民兵、先住民戦士が行きかうようになる。スミスは国王に忠誠を宣誓せず、1812年末に家族とともにカナダを去った。その後、彼はニューヨーク州オグデンズバーグ近辺で牧師を短期間務めたのち、出身地ペンシルヴェニアをめざして、真冬のニューヨーク～ニューイングランド州境地域を橇で南下していった。旅の途中、資力に乏しい彼は流しの説教師として地域のバプティスト住民に説教をするほかには、準備を進めていた書籍以外、生活の糧を得る手段がなかった。1813年3月初めごろにヴァーモント州ベニングトンにたどり着くと、スミスは現地の新聞に出版計画の広告を出して支援を得る。¹⁷⁾

スミスの『アッパーカナダ植民地地理概観』は1813年4月に、コネティカット州ハートフォードで刊行された。緒言のほか以下の5つの章からなり、バッファローの印刷業者に預けていた完成成分の原稿と、新たに執筆した文章とが組み合わせられている。¹⁸⁾

- ・第1部 ロンドン管区（アッパーカナダ）の説明
- ・第2部 植民地〔アッパーカナダ〕全体の地理的状态についての一般的説明
- ・〔第2部の継続〕 政府に関する雑多な論評
- ・補遺 ナイアガラ滝の説明
- ・〔同〕 戦争をめぐるカナダの人々の状況についての説明

以下、本稿では各章の内容を確認したい。最後の章はスミスの1812戦争観を考えるうえで重要なので、他の章よりも細かく検討する。

最初の章はアッパーカナダ植民地の8つの管区（districts）のうち、南西部のロンドン管区をもっぱら取り上げて、地誌と集落を細かく紹介している。1800年の管区再編成で新

¹⁵⁾ “Report of the Board appointed at Kingston for the examination of Persons residing in the Midland, Johnston and Eastern Districts,” RG8, I (C. Series), 688B, pp. 178–194, esp. 187, Library and Archives Canada; Hitsman, *The Incredible War of 1812*, 103.

¹⁶⁾ Taylor, “The Late Loyalists,” 23–25; Michael Smith to William Halton, Esq., Jun. 22, 1811, RG5, A-1, Volume 13, p. 5504, Library and Archives Canada.

¹⁷⁾ Smith, *Narrative of Sufferings*, 51–70; *Green Mountain Farmer* (Bennington, VT), Mar. 3, 1813.

¹⁸⁾ M. Smith, *A Geographical View of the Province of Upper Canada* (Hartford: Hale and Hosmer for the author, 1813). 以下、*View* (first edition)と略記する。

規に設けられたこの管区は、ケベック側から見て特に奥まった場所に位置する。北と南はそれぞれ未開墾の原野とエリー湖に面し、東の境界は、アメリカ独立戦争の際にイギリス側で戦い、戦後はカナダに移住したイロコイ諸族の住むグランド・リヴァー保留地に接する。西側は、川を挟んで合衆国領デトロイトに面するアッパーカナダ最南西端のウェスタン管区と接する。だがデトロイト対岸方面からロンドン管区に道路が通されたのは1809年と遅い。スミスはこのロンドン管区を、「カナダ最良の地域」と激賞する。冒頭で3ページにわたり、寒暖がゆっくり変化するので健康に良いこと、湧水が多く水質が澄んでいること、土壌は砂質で穀類に向いていることなどを力説する。続いて同管区の3つのカウンティのうち2つをタウンシップ単位に小分けして紹介するが、その際、イギリス人が土地を大量に押さえているか、アメリカ人が中心に入植しているかにしばしば言及している。前者のタウンシップでは製粉所、製材所、醸造所などの数が1ないし2と少ないが、後者ではいずれも3ないし7に上るといふ。こうした記述からは、アメリカ人の入植が管区の活性化に貢献しているというメッセージが読み取れる。¹⁹⁾

第3のカウンティであるミドルセックスについては、執筆時点(1812年4月)で入植者の受け入れ開始以来まだ2年で、集落が未発達だとして詳細な紹介を控えている。その代わりに、スミスはデトロイトから通じる街道沿いの公有地が200エーカーずつ、手数料のみの支払いでイギリス国王から取得できることに触れて、手続きを2ページにわたって説明する。公有地取得を希望する者は国王への忠誠を宣誓し、公有地を管理する執行官トーマス・タルボットに宣誓の証明書類を提出して区画を選択し、手数料37ドル半を支払う。その後申請者は2年間その区画に住み込んで、街道に面した部分を中心に開墾を行い、家屋を建てて柵を設ける。以上を満たすと2年たった時点で土地授与の証書を国王から得られる。1812年春の時点で600の区画が手続き中だったとスミスは述べる。彼が潜在的移住者に、この管区で土地を取得するよう促していることは間違いない。²⁰⁾

続く章は多数の項目を立てて、ロンドン管区を除くアッパーカナダ植民地全体を紹介している。位置と区域の項目からはじまり、土壌と地勢、植生、農業、気候、商業、鳥類と動物、魚類、鉱床と鉱物、湖、河川、先住民、村落(villages)、集落(settlements)、行政区分、管区、王の道、主要村落間の距離、人口、学校教育、住民気質、宗教、娯楽、製造業、という順番である。それまでに出版されたアッパーカナダ地理書は「短いし不備がある」と緒言で述べるだけあって、この章は計50ページと分量がある。河川の項目ではジェディ

¹⁹⁾ Smith, *View* (first edition), 7–19. 引用は7。アッパーカナダ最南西部については、Armstrong, *Handbook*, 172, 179; R. Alan Douglas, *Uppermost Canada: The Western District and the Detroit Frontier 1800–1850* (Detroit: Wayne State University Press, 2001)。一部の大土地所有について、Craig, *Upper Canada*, 33–34, 49–50。

²⁰⁾ Smith, *View* (first edition), 17–19. 公有地の取得について以下を参照。Lillian F. Gates, *Land Policies of Upper Canada* (Toronto: University of Toronto Press, 1968), 28–29; J. K. Johnson, *In Duty Bound: Men, Women, and the State in Upper Canada, 1783–1841* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2014), 11–47, esp. 21–29. ただし、公有地取得希望者に対するタルボットの対応の実情について以下を参照。Terry McDonald, “A Door of Escape”: Letters Home from Emigrants to Upper Canada,” in *Canadian Migration Patterns*, ed. Messamore, 112–113.

ダイア・モースの『アメリカ全世界地理』中のカナダに関する記述の誤りを指摘しており、スミスの自負が窺える。魚類、湖、先住民の項目は特に充実していて、主要な街道にかんする記述も詳しい。他方、各管区の紹介は前の章とは異なり、区域と土壤をごく短くまとめるにとどめている。カウンティやタウンシップ単位の立ち入った紹介はなく、集落と人口の比較的多い村落について、別項目でまとめて紹介している。²¹⁾

ここでもスミスは読者としてアメリカ人を意識し、彼らの移住を期待している。アッパーカナダのうちオンタリオ湖最奥部からエリー湖畔にかけては「ニュージャージー州トレントンからコネティカットのハートフォードにかけてと同じ緯度にあるが、数度ほど西にあるので、同緯度の東方面の天気よりも温暖である」と比較し、環境が良いと訴える。住民の社会生活を扱う項目では、「カナダ住民はごろつきや人殺しやそんな類の卑劣漢たちから成る、世界最悪の人々の一部である」という説が「合衆国の人々の大多数」に流布しているが、それは「完全に間違っている」と主張する。教育機関などは質量ともに未発達と認めつつ、娯楽として飲酒でなく冬場の橇遊びを挙げるなど、彼はアッパーカナダ社会の落ち着きを強調するのである。なお、位置と区域の項目には、「イギリス王位を継がれる方が、この植民地の土地をいつも代金や対価なしに下付することをいとわなかったジョージ3世のような、情け深いお考えをお持ちなら・・・」とあり、この章も戦争勃発前に書かれ、手数料のみで公有地を取得できることをスミスが強調しているのがわかる（スミスは註をうって、この一文は開戦前に書いたと釈明している）。²²⁾

続く「政府に関する雑多な論評」はアッパーカナダの政治体制を紹介する。立法・行政・司法の各機関、立法機関への代表の選出規定、奴隷移入の禁止、徴税の仕組みと程度、民兵制度と宗教的少数者に対する軍務免除の規定、刑法に触れているが、「この主題には若干の論評をするにとどめる」とあり、全部で4ページほどと短い。「今ではこの植民地はアメリカ政府の手に落ちるものと広く考えられている」とあるので開戦後の執筆とわかる。詳述する計画だったが、戦争中のアメリカの読者からは前向きな受けとめを期待できないと判断し、短くまとめたのだろう。実際、「人民の福利のための法制定は立法議会の業務であり、それ[法]は法となる前に立法評議会と、国王の名において総督から裁可されなければならない。だが立法評議会、総督、イギリス議会、国王は『立法議会の助言と同意がなければ』カナダ人民のために法を制定することはできない」といった解説は、イギリス本国が監督するカナダの立法制度を肯定的にアメリカ人に説明する苦勞を感じさせる。ちなみに選挙権と被選挙権を有する条件は、24歳以上、40シリング以上の財産をもち、在住7年を超えることであると記され、立法議会の議員と地域の治安判事には「合衆国生まれの者」や「アメリカ人」が多く着任しているという。各種裁判所の判事はヨーロッ

²¹⁾ Smith, *View* (first edition), 20–70, Preface, footnote to page 43. その他に以下の地理書も刊行されていた。[David William Smyth], *A Short Topographical Description of His Majesty's Province of Upper Canada in North America* (London: W. Faden, 1799); D'Arcy Boulton, *Sketch of His Majesty's Province of Upper Canada* (London: C. Rickaby, 1805).

²²⁾ Smith, *View* (first edition), 26, 64, 21 and footnote to 21. なお、これらの引用の一部は後の版では削除、または修正される。

パ出身者が多数派になっているが、裁判所の運営は「立法議会の制定法により規制され」、アメリカ人は陪審員になれる、といった記述も、アッパーカナダの公的機関にアメリカからの移住者が参画できる余地を強調している。²³⁾

補遺は二つある。一つ目の「ナイアガラの滝の説明」は、すでに注目を集めていたこの滝を扱うが、スミスは地域住民として、また地理書の著者として書いており、のちの時代の観光ガイドブックとは扱い方が異なる。スミスは瀑布の形容にかんしては淡泊で、大量のしぶきが霧状になるので虹が生じるし、冬にはその霧が周辺の木々に凝結するのが「ロマンティックで目に美しい姿」である、と述べるにとどめている。むしろその流水の圧力に注目して、紙幅を割いて水量を細かく計算し、滝より上流の各地点に製材所・製粉所を設ける可能性に言及している。資源としての水力に関心があったのだろう。²⁴⁾

戦争の扱い方にも特徴がある。この滝の周辺はフレンチ・アンド・インディアン戦争の戦場で、また1812年戦争でも戦場になっていた。スミスはオンタリオ湖からナイアガラ川を遡上する趣向で滝に至る河岸地域をひとつずつ紹介しているが、川に沿って崖が切り立つ地点の描写に註をつけて、1812年10月のクイーンズトン・ハイツの戦いの際、「数多くのアメリカ兵が、投降してイギリス軍の戦争捕虜となってから後に、インディアンによって真逆さまに追い落とされた」と加筆する。その少し上流では、フレンチ・アンド・インディアン戦争中に多数の死者が出た場所について、船で近づく者は「不安な思いに満たされるに違いない」と本文に記す。ただし、1820年代以降のガイドブックでは戦跡もしばしば観光名所として記述されていくのに対して、戦争中のスミスの記述には、血塗られた過去と現在をこれら両地点の魅力として際立たせる意図は感じられない。²⁵⁾

最後の「戦争をめぐるカナダの人々の状況についての説明」は1812年初冬までのアッパーカナダ住民の行動を論じている。アメリカに渡ったのちに短い期間で書かれたと思われる、全体として叙述はやや粗削りであり、網羅的だと考えるべきではない。数値や日付などの記載は少なく、時系列的な前後関係が多少つかみにくい。他の史料に照らすと不正確と思われる箇所もある。ここでは情報を補いつつ、3つの論点に絞って確認する。第一は開戦直後2ヶ月ほどにおける、アメリカ軍のデトロイトへの進軍とアッパーカナダ住民の混乱、第二にその後1812年冬にかけて、一部地域に親米心情が残ったことの指摘である。第三に、先住民戦士に対するイギリス軍の姿勢をスミスがどう取り上げたかを検討しよう。

スミスが最も力を入れた論点は、ミシガン準州知事で准将だったウィリアム・ハルの指揮するアメリカ軍が1812年7月初めにデトロイトに進軍してきたのに対する、アッパーカナダ南西部住民の反応である。背景を確認すると、アッパーカナダ住民は概して戦争

²³⁾ Ibid., 70–74. 引用は70, 71–72, 72。

²⁴⁾ Ibid., 75–85. 引用は79。

²⁵⁾ Ibid., 76, 77 and footnotes therein. 終戦後のナイアガラ観光とガイドブックについて以下を参照。Patricia Jasen, “Romanticism, Modernity, and the Evolution of Tourism on the Niagara Frontier, 1790–1850,” *Canadian Historical Review* 72, no. 3 (Sept. 1991): 283–318; Richard H. Gassan, *The Birth of American Tourism: New York, the Hudson Valley, and American Culture, 1790–1830* (Amherst: University of Massachusetts Press, 2008), 100–104, 116–117, 121–122.

が起これると思っておらず、少将で副総督を兼ねるアイザック・ブロックが開戦を予期し、1812年2月に人身保護令の停止を訴えた際には、立法議会で停止法案を否決していた。立法議会には後期ロイヤリストにあたる人々も代表として参加していたので、ブロックは彼らの忠誠に強い不安を覚えることになる。そして兵員の不足も深刻だった。ブロックは1812年2月、南西部の管区で召集できる民兵は合わせて900人とどまると計算していた。英領北米植民地総督ジョージ・プレヴォスト卿も同年5月の時点で、アッパーカナダ植民地全体で正規兵が1200人で、民兵の動員は4000人が現実的な上限だと考えていた。そのため、実際にハルと2000人強の兵が南西部国境に出現すると地域の住民は困惑し、イギリス軍当局者を憤慨させたことに、軍事対決の帰趨を見定めたいと望んだのだった。²⁶⁾

ハルの軍が出現したのち、イギリス軍は開戦前に召集していた民兵を、ナイアガラ川河口の旧植民地首府ニューアークにあったジョージ砦に移動させた(どの管区・カウンティの兵か、スミスは記していない)。このときスミスはこの砦に通じる街道沿いに住んでいて、ハルがデトロイトからナイアガラ川方面に進軍して、川の対岸から攻めてくるアメリカ軍と一緒に、イギリス軍を挟撃するものと考えていた。彼が数多くの民兵と実際に会話したところによると、ハルが進軍してくるなら、その軍との対峙を命じられても自分たちは「服従しないだろう」という点で、民兵は「ほぼ全員が同じ考えだった」。従軍しているが戦闘への関与はできるだけ避けたい、と民兵は考えていたのだ。カナダの民兵は正規軍の指揮下にあったので、アメリカ軍が優位だと考えていても、指令を最初から拒否するのは簡単ではなかったと考えられるだろう。なお、ここでスミスは続けて、「しかし誰一人として、ハルと手を組んで国王相手に戦おうとはしなかつただろう」と記しているが、その理由はこの個所では特に示されない。住民が決然とアメリカを支持する可能性に読者が注目するだろうことを意識して、筆がやや先走ったのかもしれない。²⁷⁾

だがハルはカナダ領内にあまり深く進軍せず、7月13日付で布告を発し、カナダをイギリス国王の暴政から解放しに来たと宣言した。アメリカ人とカナダ住民は先祖を共有しているとして住民に保護を約束し、アメリカ側を支援するか、イギリス軍への参加を控え、家族のもとで「日常の平和な職務に従事」することを求めた。今日の研究では、この布告は1812年戦争中のアメリカ側の情宣活動のうち、もっとも効果があったとされている。ブロックは総督プレヴォスト宛の7月20日付書簡で、ハルの布告は「人々の心にかかなりの影響を及ぼしています・・・現在の兵力では抵抗はむなしいとの感覚が広く現れています」と書いている。スミスも、私生活への専念を勧告した部分には、イギリス国王に忠誠を宣

²⁶⁾ Estimate of the Numbers Likely to Be Raised in Each District, in *Select British Documents of the Canadian War of 1812*, vol. 1, ed. William Wood (Toronto: Champlain Society, 1920), 288, 291; Sir George Prevost to Earl of Liverpool, May 18, 1812, in *Documentary History of the Campaign upon the Niagara Frontier in the Year 1812*, ed. E. A. Cruikshank (Welland: The Tribune, 1896), 62–63; Allen, *His Majesty's Indian Allies*, 121.

²⁷⁾ Smith, *View* (first edition), 87–89. 引用は88–89, 88。米加両軍の指揮系統の違いについて、Hitsman, *The Incredible War of 1812*, 57。スミスは召集対象者一覧に登録せず、それゆえ民兵に加わらなかったという。Smith, *Narrative of Sufferings*, 17.

誓していた民兵も「進んで従ったことだろう。彼らは心底、戦争を恐れていたから」と記す。²⁸⁾だがスミスによれば、ハルの布告にはその選択を不可能にする文言があった。

この戦争中のアメリカ軍の一般的な傾向にたがわず、ハルは先住民を強く警戒していた。彼らがイギリスと同盟して一緒に戦うならアメリカ側は「殲滅戦」に踏み切る、と牽制し、「インディアンの側に立って戦う白人が[戦争]捕虜にされることはない。瞬時に命を奪われるのが彼の運命である」とも記した。この一節がアッパーカナダの民兵を敵に回したとスミスは論じる。民兵たちは、「自分たちが武器をとるのを、また命じられたところになくとも行軍するのを余儀なくされていることを、そしてインディアンと一緒に行軍するのを防げないことを・・・ハルは承知しているのだと、強く確信していた」。グラント・リヴァー保留地のイロコイ諸族はこのとき大半が中立を表明することになるが、少数がイギリス軍に同行する。また先住民諸族の連合を構想していたテカムセの影響下にある先住民戦士たちも、イギリス軍と行動を共にしていく。したがって、ハルのもとに向かったところで、先住民と並んでイギリス軍にいたという理由でアメリカ軍は自分たちの命を奪うだろう、と理解した民兵は、この布告を「侮蔑」し、ハルの軍へと参じることは「誰も考えなかった」。²⁹⁾民兵の感覚に対してハルが無理解なことに、スミスは非常に批判的である。

スミスは従軍した民兵との会話から状況を記しているが、その他の住民について確認すれば、彼らに対するハルの布告の効果は、7月末がそのピークだったようである。ハルの軍に対峙することを念頭にロンドン管区で民兵が召集されると、3名の人物が召集を拒否するよう説いて回った、とスミスは記している。そのうち名前が記されている2名は、研究者によると同管区ノーフォーク・タウンシップの治安判事と民兵隊の旗手だった。同管区民兵隊の総責任者タルボット(先述の公有地下付執行官と同一人物)がブロックに宛てた7月27日付書簡を見ると、ノーフォークでは民兵として出頭する者があまりに少なく、行軍中にも数がさらに減っていくため、このときタルボットは軍務の解除を余儀なくされている。他方、隣接するオクスフォード・タウンシップの民兵は召集に応じた。³⁰⁾

²⁸⁾ Smith, *View* (first edition), 89; Proclamation of Brig.-General Hull, in *Documents relative to the Invasion of Canada and the Surrender of Detroit, 1812*, ed. E. A. Cruikshank (Ottawa: Government Printing Office, 1912), 58–60 (日本カナダ学会編『史料が語るカナダ 1535–1995』(有斐閣、1997年)、123頁の抄訳(立川京一訳)を参照し、一部変更した); Isaac Brock to Governor Prevost, Jul. 20, 1812, in *Documentary History*, ed. Cruikshank, 133–134; R. Arthur Bowler, “Propaganda in Upper Canada in the War of 1812,” *American Review of Canadian Studies* 18, no. 1 (Spring 1988): 11–32, esp. 13–15, 26–27. テカムセについては、John Sugden, *Tecumseh: A Life* (New York: Holt, 1997)。

²⁹⁾ Proclamation of Brig.-General Hull, in *Documents*, ed. Cruikshank, 59 (日本カナダ学会編『史料が語るカナダ』、123頁、訳文を一部変更); Smith, *View* (first edition), 90, 89. カナダ領内のイロコイ諸族の反応については、Carl Benn, *The Iroquois in the War of 1812* (Toronto: University of Toronto Press, 1998), 44–45。

³⁰⁾ Smith, *View* (first edition), 91–92. E. A. Cruikshank, “The County of Norfolk in the War of 1812,” in *Defended Border*, ed. Zaslow, 227; Militia General Orders, Jul. 22, 1812, in *Documentary History*, ed. Cruikshank, 138–139; Thomas Talbot to Isaac Brock, Jul. 27, 1812, and Talbot to Colonel Joseph Ryerson, Jul. 28, 1812, in *Documents*, ed. Cruikshank, 93–94, 98–99. なおアメリカ軍と手を結んだ一部の住民について以下を参照。E. A. Cruikshank, “A Study of Disaffection in Upper Canada in 1812–15,” *Transactions of the Royal Society of Canada*, Third Series, Vol. 6, Section 2 (1912): 20, 25.

住民の反応がタウンシップごとにはばらついた理由や、イギリス軍の働きかけについては、スミスは自分で調査する機会がなかったと思われる。7月末から8月前半の状況について、従軍拒否を訴えた面々は「逮捕され、ほとんどの人々は服従した。その後行くか残るかの選択を示され、一部が向かった」とだけ記し、詳細には語っていない。例外的に踏み込んだ記述として、ブロックがハルに対抗して出した7月22日付の布告の評価がある。スミスによればブロックは、アメリカ軍は「ナポレオンのために植民地を占領する」目的で派遣された、「アメリカ軍を撃退しないなら彼ら[住民]はフランスに連れていかれる」、と警告した。スミスはこれを、「ハルに対決する準備に向けた、奏功した一策だった」と高く評価する。だが布告の本文を確認すると、ブロックはアメリカ革命期以来の米仏同盟が更新されたと言明し、「ヨーロッパ諸国を鉄の笏で支配する専制君主の奴隷となる覚悟はあるのか」と、ナポレオンのことを匂わせて住民に問いかけているが、フランスに連行されるとは述べていない。スミスはこの布告を一つの戦術として肯定的に顧みるが、彼の記憶には誇張が入り込んだようである。その後、ブロックは「ジョージ砦のすべての兵にとって、また人々一般にとって、大事な存在になって」といったと記されている。³¹⁾

8月中旬、ブロックの指揮下、民兵を含むイギリス軍約700名が先住民戦士およそ600名強とともにデトロイト対岸に遠征すると、周知のとおり、ハルは8月16日、これと戦わずに降伏した。アメリカ側の士官たちが捕虜としてイギリス軍のジョージ砦に連行されるのを見たスミスは、「自分の目をほとんど信じられなかった」。スミスはハルの7月13日付の布告を批判しているが、彼は間違いなく勝利するとも想定していたのだろう。ただし書籍の第1版では、スミスはハルの降伏を大きな謎と感じるにとどまり、それを分析していない。その後は、イギリス軍の動員要請、民兵に対する訓練の実施、さらに正規兵の増強が行われる中、住民はイギリス軍の指令を拒否することを恐れるようになって自ら服従していった、と短く紹介される。³²⁾

なお、召集を拒んだ住民や隊を去った民兵は少なくなかったものの、アメリカ軍の圧倒的優勢を信じたのがその唯一の理由ではないことを補足しておこう。脱走兵の一覧ではなく民兵への給与支払簿を検討した近年の研究によれば、1812年7月～9月には、隊を離れた民兵は全員が軍務を拒絶したわけではなかった。数日後、ないしは一週間程度のちに隊に復帰した者は少なくない。何度も隊を離れ、繰り返し復帰した者も、別の隊に参加した者もある。民兵隊はこれら「不承不承の戦士」の不規則な参加を受け入れて運営され、構成員が日々変動していたのである。しかも開戦は夏場のことだったので、こうした一時的離任はしばしば、農場での収穫作業がその理由だった。ブロックも7月10日に民兵の半数に収穫のため農場に戻る許可を与え、「残りも、収穫が始まる瞬間、罰金20ポンドを

³¹⁾ Smith, *View* (first edition), 91–92, 91, 93; Proclamation of Major-General Brock, in *Documents*, ed. Cruikshank, 81–83. 引用は82。カナダ史研究におけるブロックのリーダーシップの評価として、C. P. Stacey, “The Defence of Upper Canada,” in *Defended Border*, ed. Zaslow, 11–20; Wesley B. Turner, *The Astonishing General: The Life and Legacy of Sir Isaac Brock* (Toronto: Dundurn, 2011), 107–154。

³²⁾ Smith, *View* (first edition), 91–93. 引用は91。Brock to Prevost, Aug. 16, 1812, in *Documents*, ed. Cruikshank, 156。

課すしかできない法に抗って・・・任務を離れるのではとの懸念」を抱いていた。³³⁾

第二の論点、親米心情の残存の問題に移ろう。イギリス軍は同年10月13日、米加境界のナイアガラ川河岸で戦われたクイーンズトン・ハイツの戦いで、ブロックが戦死したものの勝利を収める。この戦闘はカナダ住民にとって、アメリカ軍を退ける可能性が現実味を帯びて見えるようになった点で、極めて重要である。だがスミスはアッパーカナダ住民が開戦以来、状況を見極めようとしていた事例に言及し、アメリカ軍が支持を取り付ける可能性はありえたと示唆する。先述のとおり、一部の住民はハルが進軍してきた際、イギリス側に動員されるのを拒んだ。ハルの勝利を待とうと未開拓地域に逃れた者もあったという。またクイーンズトン・ハイツの戦いの後でも、民兵への召集を拒んで計70人ほどが未開拓の原野（ホーム管区のホワイトチャーチ・タウンシップ）に逃れたと記している。³⁴⁾

さらに、オンタリオ湖北岸に沿ってヨーク（現トロント）とキングストンの間に位置するニューカッスル管区では、住民はごく少数を除き武装していなかったが、「例外なく」アメリカを支持していたという。スミスは1812年12月頃、カナダから退去するためキングストンに向かう途中、この管区でマディソン大統領万歳を唱える人々を目にしたと述べる。そしてこの管区はイギリス軍部隊の拠点から100マイルも離れているので、「もしまた別の軍がカナダに上陸するのであれば、それはここであるべきである・・・特にもしアメリカ軍が大規模なら、ほとんどすべてのカナダ民兵は逃亡するだろう」、と大胆な文言も記している。ニューカッスルは1800年の管区再編成で設置が決まった新管区だが、8つの管区のうち唯一、人口が1000人に達した時点で設置するとされていた（発足は1802年）。この管区では、1790年代以降イギリス軍関係者や一部のロイヤリストなどが投機目的で土地を大規模に所有して、価値が上がるのを待っていた。一般の入植者は小区画の土地を取得しにくく、入植が遅れたと思われる。入植の遅れのためイギリス側当局の存在感も強くなく、親米心情を持つ一部の住民が声を上げやすかったのではないだろうか。³⁵⁾

だがスミスによれば、1812年のアッパーカナダではアメリカ軍が支持される可能性は

³³⁾ Christopher G. Arajs, "All the King's Men: The Militia of Western Upper Canada and the War of 1812" (Master's Thesis, Queen's University, 2005), 71–72; E. Jane Errington, "Reluctant Warriors: British North Americans and the War of 1812," in *The Sixty Years' War for the Great Lakes 1754–1814*, ed. David Curtis Skaggs and Larry L. Nelson (East Lansing: Michigan State University Press, 2001), 325–336; Militia General Order, Jul. 10, 1812, and Brock to Prevost, Jul. 12, 1812, in *Documentary History*, ed. Cruikshank, 119–120, 122–124. 引用は123。また、多くの住民がアメリカ軍から「宣誓釈放 (parole)」を求めたという指摘もある。宣誓釈放とは、公式の捕虜交換の対象となるまで再び敵方に従軍しないという条件で、捕虜を暫定的に解放することを指す。George Sheppard, *Plunder, Profit, and Paroles: A Social History of the War of 1812 in Upper Canada* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1994).

³⁴⁾ Smith, *View* (first edition), 89–90, 96–97. クイーンズトン・ハイツの戦いについては以下を参照。Turner, *Astonishing General*, 155–206.

³⁵⁾ Smith, *View* (first edition), 97; Armstrong, *Handbook*, 172, 184. この管区に入植が進むのは1820年代後半以降である。Bruce S. Elliott, "Regional Patterns of English Migration and Settlement in Upper Canada," in *Canadian Migration Patterns*, ed. Messamore, 67–68; Gates, *Land Policies*, 41.

失われていった。イギリス側への従軍を拒んだ住民に対し、イギリス軍の士官や連携する先住民のほか、民兵自身も隣人や親類に従軍を強制する作業を行ったとスミスは指摘する。民兵は、「自分たちが戦争の重荷と危険をすべて引き受けるのは耐えがたいし不当だと考え」たというのである。そして親米心情をさらに活性化させるほどには、アメリカ軍の活動が芳しくなかったとスミスは判定する。人々は「あえて反乱しようとはしないのだ、[アメリカ軍には]だまされてきたので、反乱を護ってもらえるという話に対し、いかなる信用も置いていないから」。各州が召集したアメリカ側の民兵が国境をまたぐ進軍をしばしば拒んだことも、カナダ側には知られていた。³⁶⁾

スミスの第二の論点は、アッパーカナダ民兵はむしろアメリカ軍相手に戦うことを決意した、という結論にいきつく。民兵は、「イングランドの議会に代理権のない」自分たちは戦争を選んだのではなく、巻き込まれたと考えていた。だが先述のとおり、イギリス軍には召集拒否を訴える一部の住民を拘束する実力があり、またブロックは次第に人望を集めていった。そして民兵は「いまや、反乱したとしても安全の確保が望めるほどの大規模な兵力を、アメリカ政府が送ってくるとは思っていない」。そのため、アメリカ政府の戦意をくじくことが、従軍からなるべく早く解放されるという彼らの望みをかなえる方法となる。彼らはイギリス軍を支持することにして、「アメリカ側がやってくるうちは、殺せるかぎり全員を殺すのが自分たちの義務だ」と決めたのである。これは戦場の近隣地域を自分で見聞した経験に基づいたスミスの総合的判断だと思われ、民兵の圧倒的多数がこの戦争をイギリス側で、ただし不承不承気味に戦っていくという定説にも合致する。ただし、彼が言及してすぐ否定する「反乱」の芽がそもそも実際にどれほどあったかは、他の史料を参照して慎重に判断すべきであろう。今日の研究によれば、ニューカッスル管区では親米心情が1813年以降も見られた。だが、スミスがアメリカ人読者の関心のありようを予期して、「反乱」の語をくりかえし用いる選択をした可能性もあるかもしれない。³⁷⁾

第三の論点、先住民とイギリス軍の関係にかんするスミスの理解に移りたい。テカムセとその勢力は一貫してイギリス軍に協力したし、グランド・リヴァー保留地のイロコイ諸族も、ハルの降伏以後はイギリスを支持して戦闘に加わった。先住民とイギリス軍が同盟関係を構築する伝統はアメリカ革命以前にさかのぼるもので、戦争の際の支援や毛皮交易の見返りとして、イギリス側は定期的に先住民に贈り物を提供していた。この関係においては、先住民は自分たちが従属しているとは考えていない。戦場でも先住民戦士は独自の戦いの様式を守り続け、多くの犠牲を出すことを好まず、一定の成果を上げたと判断するとしばしば戦闘から離脱した。こうした行動は、軍律と訓練を重んじて組織的な戦闘を志向するイギリス軍とはかみ合わない。それでも、アメリカ側が植民地時代末期以来、先住

³⁶⁾ Smith, *View* (first edition), 96–99. 引用は96, 97. アメリカ側の民兵がしばしば進軍を拒んだのは、兵の自州への帰属意識の強さ、召集期間の不統一、また民兵と連邦軍の関係が不十分に整理されていなかったことをはじめとする制度的な問題があったとされる。C. Edward Skeen, *Citizen Soldiers in the War of 1812* (Lexington: University Press of Kentucky, 1999).

³⁷⁾ Smith, *View* (first edition), 97, 99–100. ニューカッスル管区で1813年以降も散見された親米的な言動については、Sheppard, *Plunder, Profit, and Paroles*, 153–154; Taylor, *Civil War of 1812*, 311–313.

民に対して厳しい姿勢をとってきたのに比べると、イギリス側の姿勢は際立っていた。³⁸⁾

スミスは章の最後の数ページで戦争の社会生活への影響に触れ、教育機関の閉鎖、経済取引の停滞などに加えてイギリス軍と先住民戦力の関係も論じている。ここで彼は、イギリス軍が先住民を抑制しようと努力していたと述べる。例えば、イギリス軍は先住民に米加国境線を越えることを禁じていたという。アメリカ国内で戦争に反対している「平和の友」の活動にイギリス側は期待を寄せているのがその理由だと、スミスは説明する。先住民のアメリカ領内での略奪行為は「平和の友」の不興をかい、アメリカ世論を反英で沸騰させると理解されていたのだ。³⁹⁾ ちなみにイギリス軍が先住民の行動を抑えようとしたというスミスの理解は、クイーンズトン・ハイツの戦いを紹介する箇所でも一貫している。勝負が決まって降伏したアメリカ兵は捕虜の扱いになったが、先住民は彼らを手を掛け続けた、それゆえイギリス軍は、ブロックの戦死をうけて指揮官を引き継いだロジャー・シーフ以下、大いに慌てて「インディアンに殺すのをやめさせた」、とスミスは強調している。⁴⁰⁾

イギリス軍の対応のもう一つの例として、スミスは頭皮はぎの扱いに触れる。アメリカ側は頭皮はぎを強く恐れ、また先住民の残虐性を言い立てる際にしばしばこれに言及していた。スミスは、イギリス軍は先住民に対して頭皮に報奨を約束し、女性や子供を殺すようたきつけている、とアメリカ側が主張していると記したうえで、それに反論する。「インディアンは剥いだ頭皮に1セントの支払いも受けていない」。ここで彼は再び自分の経験を持ち出す。デトロイトへの兵站線を確保しようとハルがオハイオに向けて派遣した兵力をテカムセ配下の先住民とイギリス側が打ち破った、ブラウンズタウンの戦い(1812年8月5日)という戦闘があるが、これに参加した先住民がその後、頭皮を携えて自分の家の前をイギリス軍の拠点(ジョージ砦)に向かっていて、とスミスは記す。イギリス軍から報奨は何も出ないのになぜ頭皮を持っていくのか、スミスは複数の先住民戦士に尋ねた。

³⁸⁾ ヨーロッパからの植民者と先住民のカナダにおける相互依存の歴史について以下を参照。Richard White, *The Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650–1815* (New York: Cambridge University Press, 1991); Timothy J. Shannon, *Iroquois Diplomacy on the Early American Frontier* (New York: Penguin, 2008); Timothy D. Willig, *Restoring the Chain of Friendship: British Policy and the Indians of the Great Lakes, 1783–1815* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2008); Allen, *His Majesty's Indian Allies*. 先住民の戦闘については以下を参照。George F. G. Stanley, “The Indians in the War of 1812,” in *Defended Border*, ed. Zaslów, 174–188, esp. 178–179; Reginald Horsman, “The Role of the Indian in the War,” in *After Tippecanoe: Some Aspects of the War of 1812*, ed. Philip P. Mason (East Lansing: Michigan State University Press, 1963), 60–77, esp. 68–69; Benn, *Iroquois in the War of 1812*, 80, 82.

³⁹⁾ Smith, *View* (first edition), 105–106. 「平和の友」とはニューイングランドのフェデラリストを指すと考えられる。アッパーカナダではアメリカの新聞がイギリスの新聞よりも早く届き、ヨーロッパ情勢にかんする情報源になっていた。戦争反対の立場を伝えるフェデラリスト系の記事や論説はアッパーカナダの新聞に転載され、支持されていた。Errington, *The Lion, the Eagle, and Upper Canada*, 38–39; Jane Errington and George Rawlyk, “The Loyalist-Federalist Alliance of Upper Canada,” *American Review of Canadian Studies* 14, no. 2 (Summer 1984): 157–176. 指導者層の書簡でも、アメリカ側の国内対立が残るよう注意することが確認されている。Prevost to Brock, Jul. 10, 1812, in *Documentary History*, ed. Cruikshank, 120–121.

⁴⁰⁾ Smith, *View* (first edition), 104–106. 引用は106, 95. なお、本稿の関心はイギリス軍の方針と、それをスミスがどう記述したかに限られる。

彼らは、頭皮に報奨は「出ていないが、自分自身の手で何人殺したかを総督に見せに行くのだ」と答えたという。イギリス軍が報奨を出さないことを先住民は理解していたのだ。また彼らは、女性と子供からは頭皮を取らないとも答えたという。⁴¹⁾

その後スミスは、総督と先住民関係担当官は頭皮を見せられると実際に先住民をたしなめ、今後は持ってこないようにと指示したと記し、頭皮の剥ぎとりが今後起こるなら、それは「イギリス側の知らないところで、[イギリス側の]意思に反して」行われるものだ、と結んでいる。彼のこうした論旨は今日のイギリス軍—先住民関係史の研究と概して合致する。だがスミスは先住民を敵視するアメリカ側の姿勢が固いことを意識していたのだろう、慎重な言葉遣いもこの箇所では目立つ。読者が「信じてくれないと思うけれども」、と本文に記し、また註をつけて「信じてくれる人があるかは自分にはまったくどちらでもよい」、「それが真実であるという立場はとらない」と加筆し、重ねて予防線を張っている。次の段落でも、イギリス軍が先住民の行動を許せないほど善良だと自分が考えているとは受け止められたくない、と述べる。それでも彼は、先住民と交わした会話と自分の主張を本文に残した。スミスの議論の特色のひとつはここにある。スミスにとって自分自身の体験は、註の中で自分で述べているとおり、「この主題について自分が得られた、最も肉薄した、あるいは最大の証拠」であり、書き記すに値することだったのである。⁴²⁾

マイケル・スミスの『アッパーカナダ植民地地理概観』は、交戦相手国で刊行されたにもかかわらず、後期ロイヤリストだった元アッパーカナダ住民の見地をよく伝えている。開戦前、スミスはアッパーカナダをアメリカ人の移住先として推奨しようと、書籍の刊行を計画した。地誌の章では移住に適した場所を示唆し(彼自身も暮らしていた同植民地南西部である)、また公有地取得の条件について説明した。戦争勃発を受けて彼は政治体制を丁寧に紹介することを実質あきらめたが、追加の文章を記して、アッパーカナダ住民がアメリカ支持に雪崩をうたないことを、自ら民兵や先住民戦士と会話し、親米的な一部の住民の行動を自分の目で見た経験をもとに説明しようとした。その記述は必ずしも整理されていないが、体験に基づいて解釈に踏み込んだことがスミスの書籍の個性である。逆に、自分で見ていない事柄の記述は簡潔にとどまっている。そして、アメリカ軍に対する住民一般の失望や、先住民に対するイギリス軍の公式方針の確認など、当時のアメリカ人の通念とは食い違う主張も、彼は恐れることなく記した。これも同書第1版の特色である。

他方、スミスは最後の章の末尾を、「カナダの多くの人の見解は、この植民地は[米加]両側の住民の益のために征服されるべきだというものである」、とやや唐突に結んでいる。

⁴¹⁾ Ibid., 104, 105. なお、イギリスを支持するカナダ住民が個人として酒を一杯提供してくれることもある、と先住民戦士は付け加えたという。Ibid., 105. アメリカ側、特に西部住民はフレンチ・アンド・インディアン戦争以来、先住民に対する敵意を硬化させ、頭皮はぎはその焦点の一つだった。アメリカ兵が先住民の頭皮を剥ぐ行為も含め、以下を参照。Taylor, *Civil War of 1812*, 203–210; Patrick Griffin, *American Leviathan: Empire, Nation, and Revolutionary Frontier* (New York: Hill and Wang, 2007), 152–180; Peter Silver, *Our Savage Neighbors: How Indian War Transformed Early America* (New York: Norton, 2008), 73–90, 161–190, 227–292.

⁴²⁾ Smith, *View* (first edition), 104–106. 引用は105, 104, footnote to 104. Benn, *Iroquois in the War of 1812*, 83–84, 134–135; Calloway, *Crown and Calumet*, 210–211.

伏在する親米心情のゆえに植民地当局から睨まれているアッパーカナダ住民、先住民の攻撃を受けるかもしれない国境地域のアメリカ住民、アメリカに渡ったので土地財産を失い、取り戻すにはアメリカによる制圧を期待するしかない元カナダ住民のいずれにとっても、現状は望ましくないというのである。⁴³⁾ 住民一般がイギリス軍の支持に回ることを強調した箇所とは異質な、また自分自身のことを書いているとも思わせる結びである。この第1版ではスミスの姿勢は章単位でおぼれていて、同一の章の中でも完全には統一されていない可能性がある。だが、彼の書籍が刊行された1813年4月には戦争はまだ継続中で、潮目が変わる可能性も考え得た。スミスはこののち、何度も改訂版を刊行し、その後の戦争の展開を追っていく。スミスの言葉は改訂の中で、読者がアメリカ人であることと、その後の戦争の経過とを受けて、変化していっただろうか。この点を別稿で検討したい。

* 本稿は科学研究費助成金（課題番号16K03107）による研究成果の一部である。

⁴³⁾ Smith, *View* (first edition), 106–107.